

三島由紀夫『沈める滝』論

——自然と人間の「効用」をめぐる——

高沼利樹 TAKANUMA Masaki

1. 問題設定

三島由紀夫の『沈める滝』は『中央公論』に昭和30年1月から4月にかけて連載された作品で、執筆にあたって須田貝ダムと奥只見ダムに関する情報を中心に綿密な取材がなされたことが知られている。当時の日本では戦後復興期以降の電力不足からダムの建設が盛んに行われていたが、本作の連載に先駆けて発表された「沈める滝」について（1954年12月）からは、本作の背景にこの社会状況が念頭にあったことがうかがえる。

人間のやることは残酷である。鳥羽の真珠島で、真珠の肉を手術して、人工の核を押し込むところを見たが、玲瓏たる真珠ができあがるまでの貝の苦痛が、まざまざと想像された。このごろ流行のダムも、この規模を大きくしたやうなものである。ダム工事の行はれる地点は、大い純潔な自然で、風光は極めて美しい。その自然の肉に、コンクリートと鉄の異物が押し込まれ、自然の永い苦痛がはじまる¹。

計画停電を繰り返す程度に電力状況が逼迫していた当時、ダム建設についてはもっぱらその必要性のみが論じられていたなか²、「自然」に対する「人間」の「残酷」な加害性に注目する三島の見解は、同時代の社会への批判性を少なからず備えていたと言えよう。むろんダムを素材とする日本の文学作品の系譜においては、その嚆矢である石川達三の『日蔭の村』（1937年9月）をはじめとして、ダム建設とそれに伴う補償問題を悲喜劇的に描くことによって当時の社会に対する批判を打ち出してきた。しかしそれらのダム小説では、いわゆる里山的な「自然」が描かれることはあっても、人間から独立した「自然」が焦点となることはほとんどなかった。たとえば『日蔭の村』において村はその周辺の自然と「寄生」的な共生関係にあった³からこそダム建設をめぐる窮乏に苦しんだのであるし、小山いと子の『ダム・サイト』（1954年10月）でも村の住人が山菜の採集によって生計を立てていた⁴からこそダム建設と補償が重大な問題となっていた。これらの作品ではいわば山村の「人間」に対する「人間」の加害性への批判が描かれていたのである⁵。

『沈める滝』は作中で補償問題をほぼ扱わないことによって、経済や生活といった種々の「人間」の問題とは無縁な「自然」を主題化することに成功している⁶。『沈める滝』と同じ取材から切り分けて「山の魂」（1955年4月）を書いている⁷ことを考えれば、三島は『沈める滝』から補償問題のモチーフを意識的に排除することで、より根本的な、あるいは本質的な次元で人間と自然との関係を問い直そうとしたと考えてよいだろう。とはいえ、三島は必ずしもある種のエコロジー思想（生態系について再考する思想）や環境倫理的な態度を選択しているわけではない。後で確認するように、本作で三島は自然に対する人間の加害性を痛烈に批判しながらも、一方でその加害性こそを人間存在の重要な性質の一つだとみなすのである。

他方で本作における自然描写の背景には、三島の作家性により食い込んだ問題系の存在もうかがわれる。『沈める滝』の前年に発表した『潮騒』について三島は、明確な狙いを持って作中に自然描写を盛り込んだもののその狙いは失敗したと述べている⁸。このような自覚を持つ三島が『沈める滝』で意識的に自然を焦点化しようとしたのであれば、その問題意識は従来読解されてきたものより重大な意味を持っていたように思われる。

本作に言及した主な論考として、たとえば石原慎太郎は本作における三島の「文体」と「文学的態度」に注目しつつ、「氏の作品の内にあつた僕らと同種の現代的なフェティシズム、即ち人間対物の対立を氏はそれに時代的のひとつの精神性をもたして拡大することなく、代りにひとつの美的小説的世界として体系だて整えてしまった」と述べて本作を批判した⁹。また栗栖真人は、主人公城所昇の言動に「無機的な〈物〉の世界への志向と、有機的な〈生〉の世界への志向」を認め、この「二律背反的」な構造には三島の自作言及において説明された「かつての気質的な主人公と、反気質的な主人公との強引な結合」が関わっていると指摘し、結末で昇が「〈物〉の世界」でも「〈生〉の世界」でもない地点に置かれた点から、過去の創作倫理に決別しようとする三島の「痛ましい決意表明」を見て取った¹⁰。

「人間対物」、「無機的な〈物〉」対「有機的な〈生〉」のように、先行論には何らかの対立構造を作品から読み取ってそれを軸に主張を展開するものが多い。三島によって「自然」と「人間」、あるいは「自然」と「コンクリートと鉄」の対立構造が想定されていた本作の読解においてこうしたアプローチに十分な妥当性があるのは明らかではあるものの、その表面的な対立構造のさらに深層にある三島の自然観にはほとんど踏み込まれてこなかったように思われる。

本稿では特に、本作の主人公である昇の自然観の核をなす「効用」の概念に注目し、当時の三島がこの概念に対して明確に興味を持っていたことを随筆評論「小説家の休暇」などを参照しながら確認したうえで、本作に新たな視点からアプローチ

することを試みる。なお本稿の問題意識は、三島も参加した『群像』の創作合評(1955年5月)における寺田透の意見と、根底の部分で近似していると言ってよい。寺田は作中で「冬の近い自然」や「不感症の女」が「超絶的なもの」に連ねられているとしつつ、それら「超絶的なもの」と作中の「効用」概念との関係に興味を示している¹¹が、三島は寺田の意見も含め、合評会参加者からの問いかけをはぐらかしている。やや誇張して言えば、本稿のアプローチは三島がはぐらかしたものに光を当てようとする試みでもあるのだ。

2. 「効用」の思想をめぐって

同じダム技師である同僚たちに比べ、主人公城所昇のダムに対する価値観は特異なものである。ダムを「純粋に物質的」(185頁)なもののみならず認識は、昇が幼少期から馴染んでいた「石と鉄の世界」(168頁)に対する嗜好と根深く通じており、越冬に入ってから同僚と雑談している際にも「ダムの話題になれば、「人生は何ものでもない。問題はダムだけだ」といふ、彼の日頃の考へがちらつ」く(214頁)。本作の創作ノートでは「Hero」が「ダム」それは物なのだ」という「思想」を持つ人物として構想されている(734頁)が、都会で暮らしていた頃の昇が「思想とは縁のない人間であつた」と紹介されていた(146頁)のとは打って変わって、越冬に入ってからダムを「純粋に物質的」とみならず昇は創作ノートの構想を引き受けて「思想」を持つようになっていくのだ¹²。

その「思想」の輪郭は、対立項が現れることによって浮かび上がってくる。過去に昇の祖父の書生であった瀬山は、上記の昇と同僚の雑談を聞いて「人間が人間のために作る、これがダムさ。ダムはだから人間関係の一環にすぎないんだ」(214-5頁)と反発しつつ、ダムが「軍需産業」や経済や政治に対して持つ「効用」について論じ始める。

自然と科学の対決なんていひますがね、これはただの抽象的表現にすぎない。
……あなたがたの創つてゐるものは、薔薇の花や庭の築山ぢやない。ちやんと経済的効用をもち、といふよりは、はじめから効用そのものなんだ。
……大体もう、人間の作つた物といふものが存在しないのでね。工人的良心の作つた純粋な物といふものはもうどこにもない。物が物ではならず、必ず効用へ突走つてしまふ。科学的産物も、芸術品も、すべて何らかの関係において存在するにすぎない。ましてダムのやうに、物即効用といふやうなものが、何に使はれるかわかりはしない。(215-6頁)

瀬山はダム建設のための鉄材や電線にも「人間的な絆」を見出し、逆にそれらの「質量しか見ない」者を「土人」と呼んでいた（176頁）。瀬山にとっては、ダムの経済的その他の「効用」を重視する立場こそが「人間」的で、逆にダムを「純粹に物質的」とみなし「質量そのものに熱中できる」（177頁）昇の立場は「土人」に類する非人間的なものなのであり、いわば瀬山は「人間」の立場から「非人間」たる昇を非難しつつ、ダムが「人間関係の一環にすぎない」ことの説得を試みているのである。

瀬山は持論に説得されずダムを「物」としてみなし続ける昇に対して「それぢやあなたはどうかんだらう……あんたの理想主義の、その技術的根拠は何だらう」と畳みかける。興味深いのは、これに対する昇の返答が「盲目になれるといふ才能だよ」（216-7頁）というものであったことだ。つまり昇は、ダムを「物」とみなすからといって（あるいは「物」として対象化するからこそ）ダムが「効用」と結びつくことを否定せず、その上であえてダムと「効用」の紐帯を切断することで彼の「思想」を補強している。言い換えれば昇は事物の「効用」から意図的に目を背けることで、事物に「効用」が瀰漫することになった現代の状況を過去に差し戻し、瀬山が「もうどこにもない」と主張する「物が物では」る唯物論的な世界を再現しようと試みているのであり、この点において昇と瀬山の「思想」は対立しているのだ。

ここで見過ごせないのは、世俗的な「効用」や人間関係に絡め取られない「物」にこだわる昇の性向の対象は、ダムや「石と鉄」に限らないということだ。たとえば昇は、越冬が始まって「俺の前には永い冬がある。非人間的な、隔絶した自然がある。さうしてそのむかうにはダムがあるんだ。……俺はこれから、この時間のない物質の中で暮し、とてつもない大いものを創り出す」（208頁）と考えており、冬の山の自然とダムをともに「物質」というカテゴリーのなかに納める。この引用部の直前には、積雪によってダムサイトと市街地の交通が途絶したことで、「昇の心には喜びが生れた。彼と下界とは完全に遮断されたのだ」という語りが挿入されている（207頁）が、昇は「下界」と無縁なもの＝「物」として、冬山の自然とダムとを同列に置くのである。昇が冬山の自然を「非人間的」と評価していることもあわせて、昇の「物」の価値観は瀬山の価値観とやはり対照をなしている。

ちなみに、先にも触れた創作ノートには「Heroの対立人物」が「効用」や「関係」をさかんに論じることについても記されており（734-5頁）、瀬山が昇とは対照的な「思想」を持つ人物として前もって想定されていたことがわかる。このことから、「効用」をめぐる思想の対立が本作の制作上の力点の一つであったことが見て取れる。先に触れた『山の魂』においても自然から「効用」が取り出される描写は認められ、材木商として成功を取めた桑原隆吉が「材木の値打をあて」、「紫檀の冷たい木ざはり」を有効に活用するなど「それぞれの材木の用向きをよく心得てる」人物であ

ることが強調されていた¹³。当時の三島が「効用」の概念を複数のテキストに盛り込んだことから、この問題系に対する三島の切実さがうかがえよう。

ここで、『沈める滝』の自然の「効用」についての発想が、同時期の三島の評論にも認められることを確認しておきたい。1955年の三島の日記を集めた「小説家の休暇」の6月25日の記述において、三島は次のように述べている。

ギリシアでは、戯曲と彫刻とは同じ理念に立つてゐた。自然及び自然構造、宇宙及び宇宙構造の、忠実な模写の理念なのだ。そこでは芸術の理想は、物の究極の構造に達することだつた。

ギリシア芸術を、簡単に、人間的だなどといふ人を信用することができない。人間がそれまでやつてきたことはもつと別なことだ。プロメテウスの神話だけが、かかる意味で人間的である。プロメテウスは神から火を盗んだ。神から、全的なものの雛型をではなく、神の一機能を盗んだのだ。

……人間のやつたことは、自然力から、人間生活に役立つ効用を発見し、機能を引出すことだつた。道具や機械にとつては、物の究極の構造などはどうでもよいのだ。自然の一機能が、ただグロテスクに強調されてゐればよいのだ。

……それはそれとして、原子力時代が到来して、科学の人間の要請、つまり自然の効用と機能を盗むことが、いひしれぬ非人間的な結果におちいり、逆に、非人間的な要請から出発した芸術が、唯一の人間のなものとして取り残されたのは、逆説的なことである¹⁴。

三島は自然や宇宙の「模写」と対照的なものとして、プロメテウスの神話を例示しつつ人間が自然から「効用を発見し、機能を引出」してきたこと、あるいは「効用と機能を盗むこと」を挙げ、それこそが「人間的」な営為だと断じている¹⁵。こうした発想は、『沈める滝』において「自然と科学の対決」を人間による「効用」の創出と読み替え、それを「人間」的だとみなしていた瀬山の「思想」と大部分照応している。作中で「効用」に「盲目」であろうとする昇の振る舞いが「土人」的と評されていたのも、そのような振る舞いがプロメテウスの神話に連なる「人間」的態度の連続体から逸脱しようとするものに他ならないからなのだ。先に挙げた本作の紹介文において表明された「人間」の「残酷」さへの三島の批判的態度は、「効用」を看取するまなざしを持ちながらあえて非人間たろうとする主人公の思想に反映されていると言えよう。

重要なのは、昇が瀬山の言う「効用」から目を背けた先に別の種類の「効用」の存在を意識しており、それとともに瀬山の言う「人間」とは別の「人間」像を想定

していることである。

実際、瀬山の濫用する「人間的」といふ不潔な言葉は別として、人間主義の下に包まれてゐた時代の技術には、自分たちの作るものが神の摂理にも叶ひ、人々の幸福にも資するといふ安楽な予定調和があり、使命感があつたらうと昇には思はれた。

……技術がもし完全に機械化される時代が来れば、人間の情熱は根絶やしにされ、精力は無用のものになるだらう……しかし幸ひにして、事態はまだそこまでは来てゐない。

ダム建設はこのやうな意味で、一種の象徴的な事業だと思はれた。われわれが山や川の、自然のなほ未開拓な効用をうけとる。今日ではまだ幸ひに、われわれ自身の人間的能力である情熱や精力の發揮の代償としてうけとるのだ。

……ダム建設の技術は、自然と人間との戦ひであると共に対話でもあり、自然の未知の効用を掘り出すためにおのれの未知の人間的能力を自覚する一種の自己発見でなければならなかつた。(217-8頁)

昇はダムの建設が「自然」を対象化する営為であり、それが何らかの様態で「効用」の概念と結びつくものであることを認めている。昇と瀬山の重要な違いは二点あり、第一に瀬山がダムの完成以後、広範な人間社会の「諸関係」においてダムと「効用」が事後的に結びつくという立場を取っており、対する昇はダムの完成以前、自然と人間との一対一関係における「戦ひ」あるいは「対話」においてのみ自然の「効用」が立ち現れるという立場を取っている点、そして第二に瀬山がもはや経済的社会的な「効用」以外存在し得ない時代になつたと考えているのに対し、昇は「まだ幸ひに、われわれ自身の人間的能力である情熱や精力」と結びつく「効用」があると考えている点である。つまり昇は、経済的社会的な関係における煩雑な「効用」概念から目を背けることを選択するだけでなく、経済や社会といった夾雑物を排した一対一関係を自然と人間との間に規定し、そこに残存するはずの「安楽な予定調和」と「使命感」を前提とした「効用」概念と人間観を独自に打ち立てているのだ。創作ノートで構想されていた両者の思想的対立は、作中ではこのような重層性を伴って具象化しているのである。

3. 「無効」で「隔絶」した「物」

先に見たように、昇は事物の世俗的な「効用」からあえて目を背け、そのことによつ

て瀬山が否定した「物が物では」る唯物論的な世界観の補強を試みていた。このことを踏まえるなら、ダム建設によって破壊されダム湖に沈むことが決まっている山中の自然を見るときに昇が、「有効」性よりも「無効」性を好む方に傾斜していくことは当然の成り行きであると言うべきだろう。その傾向は昇が初めてダムサイトを訪れる車内で山の自然を見て「俺に美しく思はれるのは、超絶的な自然だけだ」（175頁）と考える箇所からもうかがえるが、次の箇所においてはもっと顕著に表れている。

もしダム工事がはじまらなければ、ここらはもつとも純潔な自然の一部であつた。

……いはばそこには「見られない」自然があつた。ダム調査の先発隊がリュックを背負ひ、ゲートルを巻いて、山々を県道づつひに歩いて来てから、ここは「見られた」自然になつた。存在の仕方が変つてしまつた。

……今やこの自然は有効な質量に変貌したが、それまでの無効の自然の美は、まだ山や川の表情に残つてゐた。川水の清冽さには、何かまつたく自分の効用を意識しないものがあつた。ダムができるまで、技師たちはこのやうな隔絶した自然と、どこで折れ合つてゆくことができるだらうか？ 『俺になら出来さうだ。かういふ自然こそ、俺の友達だといふことを、俺は知つてゐる』と昇は思つた。（179頁）

昇は、人間に「見られた」自然と「見られない」自然とを「有効」と「無効」の言葉にそれぞれ対応づけ、人間的なものに汚染されていない「無効の自然の美」の方に親しみを感じ歩み寄ろうとしている。越冬の描写は本作の構成の半分以上を占めているが、その期間中はこうした「無効」性や「隔絶」性に対する昇の嗜好がほとんど常に前景化していると言ってよい。

この昇の嗜好は、昇が越冬期間を通してとりわけ執心する滝についても当てはまる。この滝はダムサイト付近の自然のなかでも「人一人通らない川ぞひの径」を行かなければ辿り着けない位置にあり（191頁）、他方で滝の上流のほど近い場所で河原の温泉が人夫たちに頻繁に利用され「溢れた湯が川へ流れ落ちて、夥しい湯気を立ててゐる」（196-7頁）。この滝は滝として流れ落ちる前の上流で既にはっきりと「有効」に用いられていたのだが、昇にとってこの滝は「人の視線」とは無縁な「川水の清冽さ」を備えて現前するものであり、温泉を発見した後でも昇は滝の「無効」性や「隔絶」性に惹かれ続ける。このことは昇にとって他の自然と同じく滝も「有効な質量に変貌」しながら「無効な自然の美」を備えた「隔絶した自然」であつた

ことを強調している。

重要なのは、滝のこのアンビバレントな性質が滝の形態とは無関係であるという点だ。滝の流れは流動性や有機性を象徴しうるし、滝の結氷は静止性や無機性を象徴しうる。先に紹介した先行研究においても、滝の形態とその象徴は重要視されていたが、昇が滝にこだわる理由に注目した場合むしろ重要なのは、滝がどの形態であっても「有効」性を沈潜させ「無効」な「物」としての姿を示すからなのである。

では、そもそもなぜ三島は昇に唯物論的な自然観を与えなければならなかったのか。それを推測するためのヒントを、再び「小説家の休暇」の記述に見出したい。三島は「小説家の休暇」の7月29日の記述において、『潮騒』で古代ギリシャに存在した「協同体意識に裏附られた唯心論的自然」を描こうとして失敗したと述べている。三島によればモデルにした島（三重県の神島）には「政治的関心」や「社会意識」に対して「盲目」な生き方が根付いており、それは島の住民に共有されていた唯心論的自然観と結びついたものだったが、三島はそれを写し取ることができなかったという¹⁶。興味深いのは、三島が古代ギリシャの唯心論的な自然観と対照的なものとして、18世紀以降の唯物論的自然観を挙げていることだ。

自然が客観的に、物として見られることは、ただちに、自然と人間との怖ろしい決定的な対立をみとめることである。古代人はこのやうな恐怖に耐へられなかった。こんな対立をみとめるやうになつたのは、人間が科学を生み、自然に対する安心できる武器を手にして以来である。自然の征服といふ観念には、物として自然を見、対象として自然をみとめることが前提になつてゐる。科学はかくて、人間と自然との対立をわが身に引き受ける。そして人間主義なるものは、かうした自然科学の人間解釈の上に立つた十八世紀の啓蒙主義にいたつて、完全な形姿をあらはすのである¹⁷。

『潮騒』の唯心論的自然観とは異なって、三島はこの唯物論的な自然観を自作に反映しようとしたと言っているわけではない。しかし、ここでの記述が『沈める滝』の昇の自然観と重なるところが多いのは明らかだ。たとえば先の引用部で見たように、昇が現代の「自然と人間との戦ひ」のうちにも残存していると信じた「安楽な予定調和」は過去の「人間主義の下に包まれてゐた時代」に由来するものだったが、このような昇の思考は、「小説家の休暇」において述べられる三島の意見、すなわち「人間主義」の時代には自然と人間との「決定的な対立」を仲立ちする「安心」があったという意見と対応している。

恐らく三島は、『潮騒』において「政治」や「社会」に「盲目」な古代の世界を

唯心論的自然観とともに再現しようとして失敗し、その失敗を引き受けて今度は『沈める滝』で世俗的な「効用」や「関係」に「盲目」な近代的世界——すなわち人間が自然を「物」として認めるようになった後ではあるが「効用」や「関係」があらゆる事物に瀰漫するようになるよりも前の安楽な人間主義的世界——を唯物論的自然観とともに再現しようとした。このどちらも現代を否認しようとするという点では一致しており、昇が「効用」や「関係」から目を背けて新たな自然観や人間観を打ち立てようとした試みには、現代の在り様とは異なった世界を仮構しようとする三島自身の粘り強い望みも託されていたように思われる。

4. 期待、失望、自己肯定

しかし作中の昇の試みは、目標＝理想と現実の乖離という大きな問題に直面する。昇が山中の自然のなかで特に滝に愛着を持つ一因は、その滝が「顕子に似てゐる」からである（192頁）。むろんこの相似は、滝が一般的な人間らしさを備えているということの意味しない。昇が顕子と肉体関係を持ったとき顕子は不感症によって「完全な物体になり、深い物質的世界に沈んで」いた（166頁）のであり、滝と顕子はともに「物質的」で外界との接続を絶った隔絶性を備えているからこそ「似てゐる」のである。

その相似関係は越冬の期間中継続し、越冬が終わると滝は解氷して「蘇」り（281頁）、それと対応する形で顕子も不感症から「蘇」る（294頁）。滝の蘇生に対して昇は素朴な感動を覚えるが、見過ごせないのは滝と重ねられるはずの顕子の蘇生に対する昇の反応が、顕子の「物質的な細部」の美しさへの「感動」（293頁）を除いて極めて懐疑的なものだったということだ。

昇は去年の顕子の不感不動に、あれほど独創的なものがあつたからには、彼女の体に蘇つた歓喜は、彼女をもう一段独創的な女に、昇の見たこともない新しい種類の女に、ほとんど崇高で悲劇的な女に、生れ変らせるだらうと想像してゐた。しかるに歓喜を知つた女は、かけがへのない男に対する女の屈従の見本になり、昇の知つたどの女よりも凡庸な女になり、忽ちそこに腰を落ちつけ、生れ落ちたときからそこに居るやうな顔をしてゐるのだつた。（318頁）

この箇所からは顕子に「崇高」を期待していた昇の失望がありありとうかがえるが、その失望は、作中で駒ヶ岳の威容が「崇高」と説明されていたことによってさらに強調されている¹⁸。

そのとき紅葉の山々のはざまの空に、崇高な山々があらはれた。駒ヶ岳である。……駒ヶ岳は孤独な肩をそびやかし、空の青い深い静けさを、その存在で護つて立つてあるやうに見えた。地上的なものに触れて低い山々は紅葉してゐるのに、この山ばかりは地上にただ基底を許して、半ば天界に属してゐた。(175頁)

昇はこうした自然を「超絶的な自然」と呼ぶ(同)。昇が滝を重ね合わせながら顕子に「崇高」を期待したとき、そこには事後的な「効用」や「諸関係」との交わりを持たない隔絶のないし超絶的な自然の「崇高」への昇の嗜好も響き合っていたのであり、昇が顕子に失望したのはこの期待が裏切られたからに他ならない。すなわち顕子は滝と同じように「蘇つた」が、滝が「隔絶した自然」の性質を備えたまま「蘇つた」のとは裏腹に、蘇生の過程で孤独で隔絶した領域から「地上的」で「諸関係」への帰属を欲する「凡庸」な領域へスライドしてしまい、昇にとって滝からも駒ヶ岳からも乖離した存在と化してしまったのである。

顕子が不感症から「蘇つた」とき、「顕子は昇の名を呼んだが、こんな深い呼声は、昇の手のとどかない遠方から、呼びかけて来るとしか」思われなかったこと(293頁)を考えれば、昇の失望は既に予告されていたと言うべきだが、重要なのは越冬後の昇が再びダムサイトへ戻ろうと望む様子にも、顕子への失望の反映が認められるということだ。

厳寒も日々の労苦も忘れて、今また宿舎のストーヴの匂ひにあこがれる心は、昇が最初に抱いた純粋な即物的な関心などではなく、あらゆる苦悩の叫びや絶望の声が無効であり、それが決して外の世界へは届かないやうなあの状況のうちに、はじめて彼の平静な幸福が可能になったからだつた。明快な物質である石や、超絶的な自然である崇高な山々や、果てしない雪に惹かれて、奥野川ダムを志願した昇は、これらの硬い無言の物質的世界をつき抜けて、自然の無名の魂に触れたのかもしれない。(311頁)

確認した通り、昇の「物」に対する関心は、「物」が政治や経済などの「効用」や「諸関係」から切り離されているという性質と結びついていたが、今や昇は「効用」や「諸関係」から切り離されているという「超絶」的な性質それ自体およびそうした性質がもたらす「平静な幸福」に「あこがれ」ている。とはいえ、「物質的世界をつき抜けて」という表現を見れば、昇が唯物的な自然観を単に手放したわけではなく、むしろそれをさらに押し進めたことは明らかなだ。しかもこの表現は、先行する顕子への失望とも呼応している。顕子の不感症は昇にとって「深い物質的世界に沈

んで」いる状態として認識されており、顕子に対する昇の期待は、顕子がそうした「物質的」な領域から「もう一段独創的」にまた「崇高で悲劇的」になることだった。顕子が「崇高」な物質として深化するのではなく「凡庸」な人間へ墮してしまったことに対する昇の失望は、対照をなすように反動的に昇に物質の世界を「もう一段」「つき抜け」させるのである。

実際のところは、「物質の世界をつき抜け」たことが昇の言動や態度に具体的にどう影響したのかは必ずしも明瞭でない。そもそもが、ダム建設によって昇が「自己発見」しようとしたものは「未知の人間的能力」としか説明されないようなものだったし、「非人間的な、隔絶した自然」を前にして思い描いたビジョンも「とてつもない大いものを創り出す」ことに留まり、ここでも自然との対峙の先に目指されるべきものは曖昧だった。

しかし、「物質の世界をつき抜け」たという感覚は、少なくとも昇の自己認識にはさりげなくも重要な変化を及ぼした。顕子との関係を絶つことを決めた昇は、「凡庸」になった顕子をよそに、「効用」や「関係」とは無縁な「無名で任意の人間」(152頁)であった越冬前の心理に帰り着く。しかしこのときの昇は、越冬前の昇が「無名で任意の人間」の「快楽」を享受しながら、同時に「孤独といふやつがいけない」(143頁)と考え「生活を変へ」(168頁)ようと望んでいたのとは対照的に、昇は「さわやかで、平和で、さうして一人きり」であることに安堵するようになっている(347頁)。このような心理状況について、語り手は「情慾のあとには、いつも「自然」が待つてゐた」(同)と説明しているが、ここで「自然」という語が草木や山や川などの物質そのものを指し示すのではなく、昇がそれらの物質に対して見出ししてきた「崇高」な隔絶性を焦点化する形で用いられていることは示唆的だ。昇が過去の無為な遍歴を振り返りそれに肯定的な意味づけを与えられるようになったのは、「物質の世界をつき抜け」て「平静な幸福」に至上の価値を認めるようになったからなのであり、そこではもはや現物の自然は必要ないのである。

5. 「有用」な技術者の煩悶

しかし顕子の入水やダムの完成後さらに数年が経って、昇は「物質的世界」からもそれを「つき抜け」た境地からも完全に撤退しているように見える。

奥野川ダムの成功によって「技術者としての名声を高めた」昇は新しく建設されるダムの技師長にも擬せられており、「城所昇は確乎たる、社会的に有用な人物になった」と説明される(362頁)。またこれに続いて「どんな分野にも、陰惨なほど真摯な権威者といふもの」があり、「こんな種類の人間を押し進めていく情熱には、

何か最初に、最低の線でしか社会とつながるまいとする決意があつて、結果的には心ならずも、最高の線で社会とつながつてしまふやうになる」とも語られる(同)。くわえて、技術者として成熟した昇の顔が「戦争中金属供出で献納してしまつた」祖父の「銅像のお顔とそつくり」になつたという指摘を、昇が「尤もだ」と思っている(367頁)ことも見過ごせない。越冬前の昇は有力な実業家であつた祖父について「自分の効用はいつも自覚してゐ」たと考え、「自分は物を掃くためにある」と自覚している「箒」になぞらえていた(143頁)。昇が祖父の銅像に似てきたという記述は、このときの昇が「金属」や「箒」として活用された祖父と同じように、世俗的な「諸関係」の内部で社会に有益な「効用」を生み出す存在になっており、それを本人も「心ならずも」自覚して受け入れていることを示している。

あまつさえ昇は、完成後のダムを訪れる「物見遊山」の客に、ダム周辺の「観光地化」に先駆けてダムとダム湖の景色を観光させ発電所にも案内する(367-72頁)。「ダムの湛水区域」では旧道が「そのまま湖の中へ消えて」いる様子を見た客たちは大いに「興が」り、「水のなかに沈んだ土地のたたずまひが、そのままに見られはしないかと期待」する(368頁)。また発電所では客の一人が機械類の説明のメモを取り、別の一人は「発電水車を廻した水」が「水底の放水口から溢れ出て、下流へ注ぐ眼下の掘割の水面を押しゆるがして渦巻いて」いる様子を眺める(370-1頁)。ダムがいずれ観光資源としても活用されることが予示され¹⁹、また現に発電のために役立てられていることも確認されている。完成したダムが人々に「効用」をもたらす様子の記述がほかならぬ昇の案内によって導かれていることは、技術者として成熟した昇が自然から「効用を掘り出」してダムを作るだけでなく、作られたダムが世俗的な「諸関係」のためにさらに「効用」を生み出していく構造に参加していることを強調する。昇は「盲目になれるといふ才能」を自負していたが、今や彼と「効用」は余りに明白に結びついている。唯物論的自然観とともに反「効用」的世界の実現を託された昇の試みが失敗したことは念入りに確認されているのである。

一方で見過ごせないのは、「無効」や「隔絶」への昇の愛着も再び確認されることだ。昇が引き連れた一行がダム湖を眺める視線に注目したい。

やがて銀山平がその下に没した人造湖の広大な風光がひろがつた。かなたには福島県の山々が影を落してゐたが、山の姿は、そのどの高さも水面で切つても、おのづから形を成して、前からここが湖だつたかのやうに自然であつた。岸の形が、昔を知らない人の目には、少しも異様に思はれなかつた。

……しかしいかにも人造湖らしい光景は、岸から遠い思いがけないあたりに、鉾杉の深い緑の梢が、穂先を並べてゐたり、岸ちかく、半ば枯れた枝々が群が

り立つてゐたり、島といふにはいかにも浅い島が、水面すれすれに漂つて、そこに生ひ上げつゝゑる蘆がそよぎ、湖面に鶯いろの反映を与えてゐる夏の烈しい日ざしの一部を、それらの蘆がうけてちかちかと光つたりする、さういふ格別な眺めであつた。(368-9頁)

この風景描写においては、以前昇が山中の自然に対峙した際に示された価値判断、すなわち「有効な質量」としての自然と「まったく自分の効用を意識しない」ものとしての自然とを区別する価値判断が対応しているように見える。ここで山の自然はその少なくない部分がダム湖の「湖面」のうちに「有効な質量」として飲みこまれ、「人造湖らしい風景」と化している。他方でそうした有効性を表面化せずに「自然」であり続け、昇が越冬中に親しんだような「無効の自然の美」を残す「隔絶的な自然」も残存している。しかしそうした「無効」な自然は「有効」なダム湖を挟んだ「かなた」に認められるのみなのであり、この微妙な遠近感が技術者として「心ならずも」成熟した昇の心象を反映したものであることは疑いが無い。

昇は「有効」なダムとダム湖を作り出した一人の当事者としてこの風景に対峙しているわけだが、昇が「物質の世界」から撤退した理由はこの当事者性のうちに潜んでいるだろう。ダム湖の風景についての記述に続いて昇は滝を回顧し、その直後唐突に「お嫁さん」に関する忠告が昇に与えられる。現在の昇の立場に関する説明がなされた完成後のダムとダム湖の「有効」性が確認された後の記述であるということ踏まえるならば、「丁度俺の立つてゐるこの下のところに小さな滝があつたんだ」という昇の発言や、その直後の「あなたもそろそろお嫁さんをお迎えにならなくちやいけませんね」という忠告(372頁)が、その文面以上の意味を含み持っていることは明らかである。昇は「無効の自然の美」を備えた滝を「有効な質量」としてダム湖のうちに沈め、また「超絶的な自然」と同じ「崇高」さを持ちえた顕子を「凡庸」に貶め死なせた。昇に対する忠告は、これらの行為の加害性を昇に突きつけ再確認させているのだ。顕子が死んだとき、昇が「顕子の死が、あの道化た遺書と共に、生涯彼を嘲りつづけるだらうと予感」していた(359頁)ことを考えれば、滝や顕子に対する昇の加害性の自覚も「生涯」彼を縛るだらう²⁰。世俗的な「効用」に「盲目」たろうとする昇の試みはただ失敗しただけでなく、いまや「生涯」不可能なものとなったのである。

6. まとめと展望

重要なのは、昇の試みが致命的な失敗に終わったことで、逆に本作の批判性が強

度を高めているという点だ。「無効」に美を感じて非人間たろうとしていた昇が、結局は「効用」に絡め取られた（「人間」的営為の担い手である）技術者として成熟してしまい、その理想と現実の落差が当事者の悔恨あるいは未練とともに峻酷に強調される。人間社会の発展のため盛んにダム開発を押し進めつつあった当時の社会に対する痛烈なメッセージをここから看取することができよう。むろん本作は（そして三島も）積極的な生態系保全を打ち出すわけではないし、三島が自然の開発をこそ人間存在の本質の一つとみなす以上この結末に含まれる批判性がどの程度の射程を持っていたかは定かではないが、それでもこの結末の痛烈さは注目に値する。

他方で昇の試みの失敗は、その試みに託された三島の望みにとっては異なった意味を持つだろう。三島は当時の経済や社会といった俗世間的な諸要素とは無縁な非人間的世界を作品の内に構築しようとし、『潮騒』の唯心論的な自然描写の失敗を経て、それとは逆の唯物論的な自然描写の内に可能性を模索した。だとすれば本作における試みの失敗は、三島の方法論的な限界を浮かび上がらせずにはおかないはずだ。むろん唯心論と唯物論の間には無数のグラデーションが想定されるだろうが、その両極における可能性が既に潰されてしまっているという事実は、小説作品のうちに現実とは異なる世界を自然描写の操作を伴って構築しようとする企ての前に立ちはだかることになるだろう。

しかし、三島が『潮騒』や『沈める滝』に託した関心を捨て去ったようには決して見えない。たとえば『美徳のよろめき』（1957年4-6月）において主人公倉越節子が「自然と和解」して「あの海、空の雲、風、すべては節子の体内に自由に入って来て、自由に呼吸して」いた状態がロマン主義的な喜びとともに描かれた²¹のは、『潮騒』で主人公久保新治が「彼をとりまくこの豊饒な自然と、彼自身との無上の調和を感じ」ていた²²ことの焼き直しであるように思われる。また、先に引用した「小説家の休暇」で三島がプロメテウスの神話から「原子力時代」までを一区切りとして人類の技術史観を開陳していたことを考えれば、『美しい星』（1962年1-11月）で宇宙人＝非人間たちがそれぞれデパートの商品の「用途」や「目的」を確認あるいは攪乱しつつ、人類の存亡について原子爆弾を中心に議論を戦わせることも見過ごせない²³。自然と人間の関係を問い直して現代の人間や社会を相対化しようとする発想は、以後の三島の作品にも部分的に顔をのぞかせており、複数の作品を横断的に読解する必要を感じさせる。

いずれにせよ、『沈める滝』が自然描写とそれを取り巻く「効用」の概念によって、当時の日本社会で昂進しつつあった自然に対する人間の加害性を切り取り、そこに三島の根深い問題意識を組み込む形で非「人間」的世界のビジョンを浮かび上がらせた作品であったことは間違いない。本作は三島の自然観や人間観を探るための重

要な参照点として、三島の作品群のなかに位置づけ直されなくてはならないのではないだろうか。

付記

本稿の祖型となったのは昭和文学会での口頭発表である（2021年12月11日、第69回研究会）。

本稿において、三島のテキストの引用は基本的に『決定版三島由紀夫全集』（新潮社、2000-6年）を用い、参考文献一覧においてそれぞれのテキストの収録巻と掲載範囲を示した。『沈める滝』と『沈める滝』創作ノートの引用については全集の第5巻（2001年）を用いて出典を文中で「(頁数)」で示し、全集に収録された三島の他のテキストの引用については出典を注で「テキストの表題、頁数」で示した。なお本稿中の引用における仮名遣いについては基本的に引用元の方針を踏襲し、字体は新字体に改めるよう努めた。

[注]

- 1 「『沈める滝』について」、397頁。
- 2 「電力ダム」の建設によってアユやサケなどの魚類の生息環境が毀損されることについて批判的な意見が表明されることもあったが、こうした意見も魚類の減少によって「地元漁業会」の「生活」が脅かされていることを主張する方に主眼が置かれていた（『保護を考えて欲しい』『朝日新聞』、1953年2月6日）。
- 3 石川達三、161頁。
- 4 小山いと子、278-9頁。
- 5 ほか、井上靖の『満ちて来る潮』（1955年9月11日-1956年5月31日）には天然記念物の保護や「きれいな原」の存続のため周辺住民がダム建設に反対する記述や、「面白い最もやりがいのある仕事」だからダムを作るというダム技師の発言などがあり（井上靖、41-3頁）、先行する『沈める滝』との共鳴を感じさせる。しかし『満ちて来る潮』ではこれらの要素は焦点化されず、いわゆるロマンティック・ラブの成否が主題となっている。
- 6 ダムの補償問題については第7章でごくわずかに触れられるが、それに対する語り手や作中人物の反応は描かれない。
- 7 三島は大原富枝に宛てた書簡のなかで「山の魂」は「『沈める瀧』に使った資料のあまり」だと述べている（三島由紀夫、2016年、94頁）。
- 8 「小説家の休暇」、636-41頁。なお初出は1955年11月。
- 9 石原慎太郎、42-49頁。
- 10 栗栖真人、13-23頁。
- 11 大岡昇平、寺田透、三島由紀夫、385-94頁。
- 12 創作ノートに「ダム（芸術の象徴）」という記述がある（733頁）ことを重く見るならば、昇がダムを「効用」から切り離そうとしたことと、過去に三島が「重症者の兇器」（1948年3月）で「『芸術』といふこの素朴な観念を信じ、それを「生」とか「生活」とか「社会」とか「思想」などよりも「一段と高所に置く」として芸術至上主義的な態度を表明していた（『重症者の兇器』、31-32頁）ことと結びつけることが可能かもしれない。この場合ダムの「効用」が強調されるという本作の結末において三島は芸術至上主義的態度から離脱し、世俗に迎合した芸術の姿を描こうとしたということになる。
- 13 『山の魂』、419、431頁。これまで『沈める滝』と『山の魂』とはもっぱらその素材の関連

- 性について言及されてきたが、その内容的な関連性についても今後より検討されてよいだろう。
- 14 「小説家の休暇」、555-6 頁。三島の「効用」概念のルーツは不明であるが、三島が強く関心を寄せていた M. ハイデガーが「技術論」(原題 *Die Frage Nach Der Technik*, 1954 年 (Vorträge und Aufsätze, Pfullingen : Neske, 1954 年に所収)) において自然からエネルギーなどの有用性を取り出すこと (Ge-stell) を技術の本質だと定義していたことに本作の「効用」概念との類似を見出して、両者の影響関係を推測できるかもしれない。ほかにも、ハイデガーは Ge-stell の例としてライン川が発電と観光の二つの目的で用いられていることを挙げているが、本稿で後に取り上げるように『沈める滝』では川の水を貯めたダム湖が発電と観光に役立てられる様子が描かれている。なお、三島の蔵書のうち洋書については未だ整理されておらず、今後の進展が期待されている。
 - 15 この箇所は逆説的に自然の「模写」は「効用」と無関係な非人間的な営為であるという三島の考えを明かしており、瀬山が「効用」を論じる際に「薔薇の花や庭の築山」を例外視していたこととあわせて興味深い。自然の「模写」という概念はとりわけ 1950 年代の三島作品において重要な要素であるが、この問題については稿を改めて論じる必要がある。
 - 16 「小説家の休暇」、641 頁。
 - 17 同上、639-40 頁。
 - 18 管見の限り同時期の三島の文章で、少なくとも「崇高」な自然というタームや E. パークや I. カントという人名を取り上げたものは見当たらないが、三島がパークやカントの提唱した「崇高」概念から影響を受けた可能性 (あるいは W. ワーズワースや G. バイロンら主にイギリスのロマン主義文学を介した間接的影響を受けた可能性) は否定できない。昇が颯子に期待した「崇高」を巨大さや暴威の象徴として読み取ることが難しいものの、山の威容を見た感想としての「崇高」についてはこれらの象徴が無理なく結びつくだろうし、仮に伝統的な「崇高」を人間的な尺度を超えたものの持つ性質あるいはそれを見た人間の反応という意味で捉えるなら、本作において「人間」的な尺度として描かれる「効用」概念を超越した状態を指して「崇高」と名付けられたことも、影響関係の下に説明できるかもしれない。いずれにせよ本作に表れる「崇高」については今後さらに検討されてよいと思われる。
 - 19 『沈める滝』の発表時点で、ダムが観光地化されることは既に珍しくなかった。竹林征三、皆川朋子の「我が国におけるダム湖景勝地指定の歴史的考察」では、1920 年代以降ダムとその周辺地域が景勝地として親しまれるとともに当地の観光産業が発展した経緯が整理されている。
 - 20 颯子の夫である菊池が昇を訪ね颯子との関係について質問したとき、昇に「青年といふものは決して残酷になどなることはできません」と述べていた (345 頁) が、「絶望」した颯子を結果的に見殺しにした時点で昇は「青年」から脱していたと言うことができよう。このことは作品末尾で昇の成熟が描かれていることと呼応しているが、「残酷」という語が先に引用した「『沈める滝』について」における人間の営為に関する記述にも認められるのは偶然だとしても興味深い符合である。
 - 21 『美德のよろめき』、621 頁。
 - 22 『潮騒』、260 頁。
 - 23 『美しい星』、54、147-54、216-69 頁。

[参考文献]

- 石川達三『日蔭の村』『石川達三作品集』第1巻、1972年、新潮社、161-282頁。
- 石原慎太郎「文明批判の強靱な鑿」『文学界』昭和31年8月号、1956年、42-49頁。
- 井上靖『満ちて来る潮』、1956年、新潮社。
- 大岡昇平、寺田透、三島由紀夫「沈める滝」『群像創作合評4』、1970年、講談社、385-94頁。
- 栗栖真人「三島由紀夫『沈める瀧』考」『語文』第90輯、1994年、13-23頁。
- 小山いと子『ダムサイト』『中央公論』第69年10月号(793号)、1954年、277-311頁。
- 竹林征三、皆川朋子「我が国におけるダム湖景勝地指定の歴史的考察」『土木史研究』第15号、1995年6月。
- 三島由紀夫『潮騒』『決定版三島由紀夫全集』第4巻、2001年、225-378頁。
- 『美德のよろめき』前掲書第6巻、2001年、491-649頁。
- 『美しい星』前掲書第10巻、2001年、7-298頁(参照箇所は54、147-54、216-69頁)。
- 『山の魂』前掲書第19巻、2002年、419-33頁。
- 「重症者の兇器」前掲書第27巻、2003年、新潮社、28-33頁。
- 「沈める滝」について」前掲書第28巻、2003年、新潮社、397-8頁。
- 「小説家の休暇」前掲書第28巻、2003年、新潮社、553-656頁。
- 「新資料 三島由紀夫全集未収録書簡 大原富枝宛」『三島由紀夫・没後45年』、2016年、鼎書房、94-8頁。
- 著者不明「保護を考えて欲しい」『朝日新聞』、1953年2月6日。